

## 1. 家族計画の意義と避妊法

子どもの人数や子どもを産む時期と間隔を考 えることを\_\_\_\_\_といいます。  
\_\_\_\_\_は、女性にとって健康のみならず、その後の人生設計に影響を及ぼす重大な  
出来事です。\_\_\_\_\_をすれば妊娠する可能性があり、若い世代ほどその可能性は  
\_\_\_\_\_になります。

したがって、性交をする前に「いま、妊娠を望んでいるのかどうか」をパートナーとお互い  
に\_\_\_\_\_必要があります。その際、「いま妊娠した場合、出産が可能かどう  
か」も、母体となる女性の心身の健康状態、\_\_\_\_\_や\_\_\_\_\_などを踏まえて、よく  
話し合っておくことが大切です。

\_\_\_\_\_にとって母体は生きていくための環境の全てであり、\_\_\_\_\_がそのまま  
子どもの健康状態に重大な影響を及ぼすことにもなるからです。

このように、妊娠に伴う様々な問題を考慮して、子どもを望む時だけ妊娠する様にし、  
子どもを望まない時に\_\_\_\_\_することは、女性の健康だけでなく、\_\_\_\_\_を  
守ることに繋がるのです。ここに健康からみた\_\_\_\_\_の意義があります。

## 2. 避妊法とその選択

### ① コンドームとピル

「1回ぐらいの性交では妊娠にない」というのは全く根拠のないことであり、パートナーと  
の間で、「\_\_\_\_\_したい。\_\_\_\_\_も可能だ。」という合意が成立している時を除けば、  
必ず避妊するべきです。避妊にはいくつかの方法がありますが、一般的には\_\_\_\_\_や  
\_\_\_\_\_が利用されています。コンドームは男性の\_\_\_\_\_に装着し、\_\_\_\_\_を  
膣の中に出さないことで避妊します。比較的簡単に購入できることから、わが国ではもっと  
も多く利用されており、正しく使用すれば避妊効果が高く避妊率が\_\_\_\_\_％にもなると言  
われ、性感染症の予防にも効果が得られます。低用量ピルは、女性が\_\_\_\_\_する、  
ことによって女性ホルモンを調整し、\_\_\_\_\_を抑えること等で避妊を行います。医師  
の処方にもとに入手することができ、正しく使用すればほかの避妊法に比べて\_\_\_\_\_％  
という高い避妊効果があります。しかし、コンドームやピルなどの避妊法にもそれぞれ  
問題点も存在します。例えばコンドームは正しく装着できない場合には避妊率  
が\_\_\_\_\_％まで低下すると言われており、コンドームは使用の仕方によっては避妊効果

がなかったり、ピルは\_\_\_\_<sup>など</sup>等があると避妊率が\_\_\_\_<sup>ひにんりつ</sup>%まで下がると言われて  
おり、また\_\_\_\_<sup>けんこうもんだい</sup>による健康問題が起こることがあります。避妊法の選択にあたって  
は、これからのことも考慮しながら、\_\_\_\_<sup>こうりょ</sup>であるとともに、2人にとって必要  
な条件を満たすことが大切です。場合によっては、複数の避妊方法を\_\_\_\_<sup>ふくすう ひにんほうほう</sup>する必要  
があるかもしれません。パートナーとよく話しあい、協力することが大切です。

コンドームやピルの他にも、月経の周期から安全日を考 える\_\_\_\_<sup>ほか げっけい しゅうき あんぜんび かんが</sup>といったものも  
存在しますが確実な避妊方法とは言えないので注意しましょう。

### 3. <sup>じんこうにんしんちゅうぜつ</sup>人工妊娠中絶

わが国では現在、妊娠した場合でも特別な理由があれば、ある限られた時期までは、  
手術によって胎児を母体外に出すことが法律(母体保護法)で認められており、これを  
\_\_\_\_<sup>じょせい</sup>といいます。これは、女性にとって\_\_\_\_<sup>おお</sup>が大きく、精神的にも  
\_\_\_\_<sup>のこ</sup>を残すことになります。行う時期が遅くなるほど健康を損なう可能性は  
\_\_\_\_<sup>たか</sup>高くなります。妊娠の可能性があれば出来るだけ早く妊娠に気付くことが大切です。  
中絶という\_\_\_\_<sup>ちゅうぜつ</sup>行為をしない為にも、妊娠を望まない性交の  
\_\_\_\_<sup>ばあい</sup>場合には、確実に避妊することを忘れてはなりません。